
バイオアイランド seventeenth birthday

デッド星奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオアイランド seventeen birthday

【NZコード】

N4222X

【作者名】

デッド星奈

【あらすじ】

12月25日、17才の誕生日を迎えた少女、文月 桜は誕生日プレゼントとクリスマスプレゼントの二つ分のプレゼントを使って一人アメリカに旅することを決める。

だがその途中飛行機の様子がおかしくなり、海面に垂直墜落大破、無人島に一人流れ着く。その無人島では死者が徘徊していた。たつた1人生き残った少女のサバイバルホラー。

プロローグ（前書き）

まだまだ未熟な僕ですが、頑張っていきたいと思います。

プロローグ

2012年12月25日 クリスマス

凍てつくような雪の季節のめでたい日に、私の誕生日がある。誕生日がクリスマスと、かぶった私は毎年両親からクリスマスプレゼントと誕生日プレゼントを二つを貰っていた。

この2012年に私は17歳になる、両親にはこれが「人生最後の誕生日プレゼントとクリスマスプレゼント」と言われて悔いの残らないように過ごすつもりだ。

その為に私は人生最後の素敵なプレゼントを二つ分一緒にしてアメリカに旅行にいくことにした。それも一人で。

さあ人生最初の一人旅だ。

「パスポート良し、お金良し、あとは自由の国への護身用の銃・・・私の可愛い相棒ブラックパニッシャー良し。」

空港で今、持ち物を確認している少女、文月 桜は愛用の銃ブラックパニッシャーとその他持ち物があることを確認した後にブラックパニッシャーのみを特殊なケースに入れてゲートをくぐり抜けた。金属探知機の音はこのケースのおかげで鳴らない。桜はゲートを過ぎて少し離れた広場で人目に触れないようにケースからブラックパニッシャーを出して着てる赤いジャケットの裏側に装備したホルスターに押し込んだ。

「ふう・・・これでいいわね」

そして飛行機に搭乗、指定された席に座るとゆっくりと目を閉じて睡眠を始めた。

彼女はこの数時間後悪夢の誕生日を迎える

終わりの始まり。

桜が睡眠を始めて数分後、アナウンスが入る「今回のフライトは悪天候の為ルートを変更いたします、なお到着時に遅れが生じる可能性がございます。」

睡眠したままアナウンスを耳で聞き取る桜、そしてその数分後に離陸体制に入る機体。離陸体制のせいで上半身がやや傾く感覚を覚えた桜は、気になつて睡眠から目を覚ました。

「飛行機の離陸つてきついのね・・・飛行機なんて初めてだし・・・うわあ酔つてきた。」

離陸体制がやがて終わりシートベルトを外しても構わないという意味を持つマークが座席から見える電光掲示板に表示された。すぐさま桜はシートベルトを外し口元を抑えて機内のトイレに駆け込んだ。「うう・・・気持ち悪い、飛行機じゃなくてフェリーの方が良かつたかな」

トイレでひざまづいて、顔色が真っ青な桜、独り言を呟くと口から嘔吐。さらに気持ちわるくなつてしまい、しばらく身動きが取れずにボーッとしていると、客席から英語の怒鳴り声が聞こえてきた。「つるさいなあ？」

その怒鳴り声に混じつて日本語の悲鳴が今度は聞こえてきた。しかし悲鳴はすぐに收まり、怒鳴り声だけになつた。桜はトイレにこもつたままで声だけを聞いて現状を把握した。

間違いない、ハイジャックされた。

「フリーズ！フリーズ！」

英語で動くなという意味の単語。桜はトイレにこもつた状態から発見されれば、殺されると考えてトイレから出るのを止めた。だが同時に愛用の銃プラックパニックシャーでの応戦を考えた。

「使つたこと無いんだよね人に向けては・・・相手は何人かな、武器は刃物？銃器？」

トイレの内側から壁に耳を当てて考え始める更に現状をよく把握する。

「相手は4人、サブマシンガンを装備人質の位置は変わらないわね、よし・・・こもってましょ。」

あつたり応戦を諦める桜。

数時間後

雷雲が機体を包む、一方桜はトイレでまた睡眠、だか機体が雷雲に包まれていた為雷の轟音ですぐに目が覚めた。通常飛行機は悪天候の場合雲を避けるが、ハイジャックのせいにルートの変更を行つていないうようだ。

「ん？ああ？つるさいなあ雷・・・さすがにこもつてるのにも飽きた。」

そう言うがすぐにハイジャックのことを思いだす。

「あーもう最悪の誕生日」

また独り言、しばらくして壁に耳を当てて客席はどうなつてているか探る。

「物音ひとつない、そんな・・・誰もいない！」

すぐにトイレから飛び出して客席にもどる。

耳で聞いた通り誰もいない、さらに操縦席を覗く、運転手すらない。トイレで眠っている間に何が起きたか、わからず体が恐怖で硬直する。

誰もいない飛行機、雷雨の中1人絶望を覚える、桜。さらに追い討ちをかけるかのように雷が飛行機を直撃する。操縦席の自動制御システムがダウン。

「あ、私死ぬんだ・・・」

次第に機体が傾き「コードが下がる、桜は何もかも諦めらていた。

機体はやがて垂直に下を向く、雲を抜けて海面が見える、真下を向いたままエンジンがかかっている。速度は機体のジェットタービンと落下速度で増していく。そして海面に激突。機体は大破し海底に沈んだ。

数時間後

「うう・・・あつ、痛たた・・・ここは?どこ?」

「私は生きてる?」

赤いジャケットを着た少女が目を覚ます、目を覚ました場所はどこかわからぬ砂浜だつた。

「とりあえず生きてて良かつた、でもここはどこなの?」

孤島で1人の少女が起き上がり回りを見渡す、そして自分の体につけた海藻を取り払う次に愛用の銃ブラックパニッシュャーのハンドガンがあるかを確認する。

「ある・・・」

砂浜の天候は悪く豪雨が降り続けていた、桜はすぐに雨のしぜる場所を探すため砂浜の奥にある森に入つて行つた。

「この木のそばなら雨はしぜる」

木のそばに桜は座つて服が乾くのを待つた。ふと木を見上げる。

「きや!」

木にパラシユートで絡まつてゐる白骨化死体をみつけた。よく見るとパラシユートにはアメリカの国旗が描かれていた更に軍服。桜は首を傾げて考える。

「ここはアメリカなのかな?」

やがて雨が止んで深い霧に包まれる、日中にも関わらず霧のせいで視界が悪い。

「この島誰かいののかな?誰かー!助けてー」

呼びかけも虚しく霧に飲まれる、誰も返事をしない、仕方なくその場を離れ砂浜へ戻る霧は森だけではなく砂浜をも飲み込んでいた。

「ここの霧にかおかしい……」

そつ思いながら砂浜沿いに東に進んでいく。

パシャ

足元で何かを踏み潰す感触がする、恐る恐る足元みると、腸を引き裂かれ内臓が剥き出しのスーツを着た人間だった。

「……え、なにこれ嘘、飛行機に乗つてた人」

飛行機の中で見覚えのある顔の人間だった、その変わり果てた様子と言つたらもうひどい有り様だった。桜は急いで足をびける、そして死体がなにか手に握つてることに気がつく。

血で汚れてしつかり読めない。

「えーと……なになに、ハイジャックの手引きは順調だ あとは乗員が大人しくしてれば俺は自由の身だ、あの島に奴らはなんの用が……」

あとは一面血で染まつていて読めない。

「この人人がハイジャックの手引きをなんの目的で……島つて……まさかここは島？」

現在地が島であることを把握した桜は、同時にハイジャック犯もこの島にいるという可能性があることを知る。身が震える恐怖なのか怒りなのかどつちかは誰も分からない。もし怒りなら誕生日とクリスマスを台無しにされたこと、もし恐怖ならハイジャック犯が同じ島にいること。

「少なからずこの島には誰かいるのね」

誰かいる、そう思つるのはハイジャック犯が誰もいないところに行く訳がないと思つたからだ。

ジャリ、ジャリ

後ろで足を引きずるような歩き方をする音がする。桜は振り返る

「誰！」

近寄つてくる足音の主は血まみれで顔は皮膚がほとんど剥がれ落ち
ていて左腕がなかつた。

「・・・キャアアアアア！」

生き残れ

叫び声を上げる桜、それに対してもつくり迫る動く死体。

「あ、銃……」

ホルスターから銃を抜き取り構える。

「動くな！」

構わずに前進してくる動く死体、しかし動く死体は桜に興味を示さず、砂浜に倒れていたスーツの死体にかぶりついた。

「しかとしてんじゃねえ！」

動く死体の頭部に一切の迷いとか容赦なさすぎるハイキックを繰り出す。グシャという鈍い音と共に動く死体の頭部が吹き飛ぶ。

「死んで……たよね、あれ……動く死体なんて初めてみた、ゾンビか。」

一方その頃

黒い戦闘服に身を包んだ二人の男が島の中心に位置する施設の外で話をしていた。

「マウスは？」

金髪の男が仲間の一人に聞く。

「死んだよ飛行機の乗員を始末し損ねた、今頃うなつてこの島の森をさまよってるさ」

サングラスをかけた男が答える。

「エリック、上だ！」

「ん?ぎややや！」

サングラスをかけた男の上からこの世の生物とは思えない生物が降ってきた。その生物は大きなハエのような頭をしていて口から舌を出し、エリックと呼ばれたサングラスをかけた男の心臓を舌で貫いた。

「くそう・・・！」

金髪の男は持っていたサブマシンガンを乱射。

「モスキートめ！」

だが一発も当たらずに逃がしてしまった、装備にあつた無線機を取つて叫ぶ。

「隊長！ エリックが・・・エリックがやられた・・・隊長？ 応答して下さい！ 隊長・・・」

応答なし、得体の知れない生物が徘徊する島に1人取り残された男。

「ウオオオ！ ！」

「なに？ 今の叫び声？」

ゾンビの頭を蹴り飛ばした、赤いジャケットの少女が島の森の方を見る、そして森の方へ向かつて歩き出す。未だに島から霧が晴れない。

「誰かいるのかな？ もつと奥にいるのかな・・・」

霧の深い森にブラックパニッシャーを構えながら進む桜、森は毒々しい植物でいっぱいな上、足元の地面は豪雨のせいで滑りやすくなつていた。

「歩きにくいし、あー靴が台無し・・・」

しばらく森を進むと呻き声と地面を這いずり回るよつた音が聞こえてくる。

「ゾンビ共か・・・上等だ歓迎してあげるわ」

銃を撃ちながらゾンビを次々倒して行く。近すぎて、狙いが追い付かないゾンビに対しては、ハイキックを頭に狙つて繰り出し応戦した。

「キリがないわね、一旦木の上に登るか・・・」

呻き声を上げながら、桜が登った木に近寄り手を上げて捕まえようとする。

「囮また・・・隣の木に飛び移れそう、よし」

木の太い枝の上で走つて助走を付けて飛び移つた、その拍子に枝が

折れて戻れなくなつた。

「あーもづ、どうしたら、ん？あいつは」

飛び移つた先の木から見えたのは黒い戦闘服のゾンビだった、サブマシンガンを装備していて、胸のハーネスにはグレネードが付いていた。

「ハイジャック犯か自業自得つて感じ、でも利用できそうね」「ブラックパニッシャーの狙いをグレネードに定めて打つ。」

「当たれ！」

グレネードに見事命中、爆発がゾンビを一気に飲み込んでいく、だが同時に桜が乗っていた木が根元から倒れる。

「あわわわ、とう！」

思いきつて飛び着地、ジャケットの襟を

直すと、ちょろいものねと言つてまた歩き出した。

「ブラックパニッシャー・・・弾切れか、まあいいわ。」

森に入つて数十分、霧はまだ晴れない桜は自分がどの方向を向いて歩いてるのか怪しくなつてきた。

「声の方向はこっちのはず・・・多分。」

もはや勘を頼りに進む。すると、突然羽のような羽ばたく音が聞こえてくる。次第に大きくなり後ろに何かいる。

「おつと！挨拶もなしに襲いかかつて来るなんてレティに失礼よ」
羽の音の主はモスキートだつた、大きな爪で桜に襲いかかるが回避された。モスキートは両腕の爪を力チカチと鳴らし、再度飛び上がり襲いかかつてきたが、桜に空中回し蹴りで帰り打ちにされ、木に叩きつけられた。

「ブラックパニッシャーに弾が入つてたらもつと楽に殺して上げられたのに・・・」

羽ばたけなくなつたモスキートに近寄りトドメの顔面にハイキックぐしゃぐしゃになるまでじっくりと蹴り続けた。

「ゾンビ以外にも変なのいるなあ、なんか慣れてきちゃつた」

生き残れ（後書き）

キャラクター設定です　遅れてすいません

文月 桜

17才

特技はテコンドーと射撃

いつも赤いジャケットを着こなしてゐる

両親が格闘家で憧れて幼いころからテコンドーを始める、今では岩をも碎く蹴りとなつた。

愛用銃のブラックパニッシャーは過去自分を襲おうとしたヤクザの男から奪い取つた物で元々は銀のステンレス製だったけど黒く塗装したよく空き缶を的に練習、弾は実弾でとっても危険、弾切れした時はなんと両親がブラックマーケットで購入してくれた。

学校ではかなりレベルの高い方で容姿や勉強、スポーツも完璧、女子によく持てる。

なにかと物事に慣れるのが早い。

エリック

「エリック、上だあ！」

以上です。

金髪の男 名前はまだない

けどネズミでもマウスでもない

「我が輩はマウスである、名前はまだない」
知る人ぞ知るマザーネタ。

マウス

死んだよ、シェパードが掃除をさせてる

隊長

応答なし。

ふざけてすまん

「まつたくしつこいなあ」

息を切らしながら、迫りくるゾンビを蹴り飛ばし続ける、桜。さすがの彼女の顔にも疲労が見え始めていた。蹴り飛ばしては移動、また蹴り飛ばしては移動、この繰り返しが続いている。所持している愛用の銃ブラックパニッシュャーの弾丸の数も、ついさっき底をついた。

位置は島の森の中心からみて南東。桜が森に入つてから約一時間が経過した。

このまま体力が尽きたらマズいと悟った桜は、ゾンビを蹴り飛ばすのをやめて、逃げることに意を決した。はあはあと息を切らしつつ、体力の続く限り。やがて、ようやくゾンビの大群を振り切り一息付ける状態となつた。

「ふうふう、ずっと歯を食いしばつたていた」

そう言つて桜は自分の顎を手でつかんで、左右に動かした。

ガサガサ ガサガサ

「・・・ゾンビとは違う・・・もっと別の音だ」

「フリーズ！」

聞き覚えのある声、桜は音がした方向を見る、そこには黒い戦闘服を着た金髪の男が立っていた。サブマシンガンにグレネードを装備し、サブマシンガンの照準をピタリと桜につける。

「ハイジャック犯か、仲間はどうしたの？」

「英語が話せるなら、脅す必要はないな、仲間は死んだよ今頃奴らの仲間さ」

金髪の男はサブマシンガンの安全装置をかけて照準を下ろす。

「乗員は全員始末した筈だが、君は？」

桜はニヤリと笑つて答える。

「自分の自己紹介が先でしょう？それになぜこんな島に来たか理由も聞いてないわ」

金髪の男は頭に手を当てて、これはまいったなという、表情になる。

「俺の名前は、ルーカス。君は？」

桜は呆れた表情をして、ブラックパニッシャーを取り出しルーカスの、喉に突きつける。

「私の質問に全部答えなさい！あなたの質問はその後！」

「わかつた落ち着いてくれ、俺はこの島にある戦時に使われた、実験施設の調査に着たんだ、さらに島の位置がハツキリしない為上空から降下しろとの極秘の命令だつた。」

「それでハイジャックか・・・」

ルーカスの喉に突きつけていたブラックパニッシャーを下ろす。

「文月桜、お前らの下らない作戦に巻き込まれた、哀れな女子高生以上。」

ルーカスはため息を漏らす、しばらくして桜のブラックパニッシャーに弾が入つてないことに気がつきガクッと膝をつく。

「ルーカス、弾ある？ハンドガン用の」

「ある、いくつか渡しておく」

桜はブラックパニッシャーに弾を込める、ルーカスを置いてその場を去ろうとした。

「までよ！どこに行くんだ！」

「あんたの言う実験施設とやらに、森よりはマシだわ」

「確かにそうかもな・・・」

ルーカスは先走る桜の後を仕方なく追いかけて行く、しばらくして桜が歩みを止める。

「なにかいる、ルーカスあれは？」

桜が指差した方向を双眼鏡で覗くルーカス、レンズに映つたのはゾンビが走っている姿だった。

「肉体が劣化してないゾンビだな、他の奴らと違つて超人的な身体能力をもつが知性がないのは、ゾンビと変わらない。」

桜はそれを聞いてルートを迂回する事を提案、もちろんルー・カスは賛成した。

肉体が劣化していないゾンビを避ける為に、桜とルーカスは進行ルートを迂回し島の西の方向へ進んだ、霧で視界が悪くいつ敵と鉢合わせしてもおかしくない状況。

桜がまた足を止める、それに釣られルーカスも足が止まる。

「どうした桜？」

「囮まれた、肉体の劣化してないゾンビに」

「なに！ 奴らに知性はない筈、とりあえず逃げるぞ！」

禍々しい叫び声が霧の森に響き、声の主は二人に襲いかかる。二人は、はぐれないよう

目的地に全力疾走をするが、敵の足の方が数倍速い。

「ちつ！ ルーカス敵数を数えろ！」

「え！ ？ 戦う気か！」

「当たり前だ、このまま逃げても体力を消耗したとこを狙われる！」

ルーカスはサブマシンガンを構えてスコープで敵を覗いて数える。

「四人だ！」

敵は素早い動きで木から木へ飛び移る様にして動く、桜とルーカスは銃でなるべく敵の動きを読んで打つ。

「一人、二人、ふたり始末したわ！」

桜の弾丸は見事に敵の眉間に二体とも貫いていた。

「うおあおお！ 一人始末、残り一体のターゲットロスト！」

「上よ！」

ルーカスは上に銃を構えるが遅い、敵が両手を伸ばしルーカスに掴みかかる直前で、桜の空中回し蹴りが敵の頭部を直撃、バキッとう音と共に敵は地面に倒れた。

「貸し一つよ、どうせこうい類の物は噛まれたらアウトでしょ？」

「ああ、助かつたぜ礼を言うが桜、君は何者なんだ？」

「ただの女子高生のテコンドーの師範代だよ」

「それすごいじゃん」

ルーカスは目を丸くして言った、そして敵の死体を調べる、よく見ると全員服はあまり汚れていない。使えそうな物がないか調べていると桜が口を開いた。

「この人たち、まさか飛行機の乗員？」

「そうみたいだな、半券がポケットに入つてた、おータバコだラッキー」

「ちょっと、今吸わないでよ！ てかあんた年は？」

タバコにライターで、火を付けてから一服するとルーカスは答えた。

「二十一だ、問題ないだろ？」

確かに年齢的には問題ないだろうが、それ以前の問題があるだろうという顔をする桜。

桜はポケットから、携帯を取り出す電波はなかつたがGPSはまだ通信可能だつた。GPS機能を使って現在地が何処なのかを調べ始める。

「そんな！ どうして！ 私たち今海の上なんかにはいらないのに！」

GPSが指示した場所はなにもない真っ青な太平洋の海だつた。

「当たり前だ、ここは戦時に使われた切りで、実験施設には極秘の生物兵器の開発が行われてた、地図からは抹消されてる。」

「そんなんじゃあ、脱出も完全不可能つてこと」

ルーカスはそれを聞いて、まだ諦めるには速いと答えた、彼は二日後にここにヘリがくると言つた、但し無事ヘリがルーカスと桜を迎えるには、条件があつた。

「その条件て？」

桜は息をのんで聞く。

「ヘリがくるまでに、実験施設内部の地下にいつてサンプルドと描かれた試験管を持ち帰ることだ、もし果たせなければ始末される」

「始末って、私は無関係なのに…」

「この作戦を知った以上生かして置いてはならない決まりなんだ！」

本来なら君はとっくに殺されてるんだ」

桜は自分がトイレにこもつていたことを始めて幸運に感じた、それと同時に若干複雑で残念な気持ち。

霧の深い森で桜は決意する。

「殺されてたまるか、私は私自身の為にサンプルDを取りに行く。」

「賢明な選択だな、さあ行こう時間がない」

二人は実験施設に向かう。

キャラクター設定 その2

ヤツホーあとがきです僕の大好きなあとがきです！ 新キャラクターも増えたので書いておきます。

ルーカス・ハル

21才

得意・好き タバコ パソコンいじり

嫌い・苦手 桜 主人公 国とか政府

とある事件の濡れ衣をさせられ、死刑囚になつてしまつ可哀想な人、ある日死なずに済む方法を教えてやると教えられ連れていかれたのは、アメリカ軍訓練所だった。

桜「私一人が良かつたな・・・」

最初の夜

俺の名前はルーカス・ハル、死刑囚だ。死刑囚になつた理由は濡れ衣を着せられたこと、濡れ衣を着せたのは俺の実の父親だつた。父親の犯した罪は連續殺人事件、なぜそんなことをしたのかは知らない。俺はこの事を知つたのは俺が逮捕されてからだ、逮捕され間もなく法廷で死刑判決、誤解を解こうとは思つたが、情報操作がされていた。誰がこんな事をしたか分からぬ。

数日後、嬉しいニュースが入つた、あるPMCが死刑囚を募集しているといふこと。死刑囚募集という事は限りなくヤバい仕事をさせられるのは分かつてゐた、それでも俺はどんな事をしてでも生きていたかつた、人間どんな無様な姿を晒そうと生きてこそ価値ある生物だ、死刑を待つくらいなら生きる可能性がどんなに低くても、その糸にしがみついた方がマシだつた。

PMCに雇われ数ヶ月の訓練の末、最初の実戦を命令されこの島に来た、だがこの作戦は国にもバレずに、やらなければならなかつた俺を雇つたPMCは生物兵器の極秘開発を行つていた、とんでもない場所だつた。

作戦をバレないよう、まずは日本に偽装亡命そしてハイジャックを裝つて島へパラシュートで上陸、乗員は島で全員始末する筈だつたが簡単なミスで逃がしてしまい仲間のマウスが最初にやられた。次にエリック、そして先に施設内部に入つた隊長は連絡が着かなくなつてしまつた。何もかも終わつた、そう思つて浜辺に向かつて自殺でもいつをしてしまおうと考えていたら、桜と出会つた、赤いジヤケットを着こなしていて、とても顔立ちの整つた綺麗な女の子、最初はこの子もすぐ死んでしまうだろうそう思つていたが、違つた桁外れの強さに機転の利く戦闘方法。これは使える、最後の希望として俺はこの子に掛けた。

た。

時刻が午後七時を回った頃、霧の深い森で生存者一人は最初の夜を迎える。霧に夜といことで視界はいつそう悪くなつた。

「懐中電灯・・・あつた桜、俺からあまり離れるなよ」

「了解・・・しかしながら、ゾンビが知恵を」

「さあな、脳も劣化しないなんて例はブリーフィングではなかつたな。」

たわいない素朴な疑問、二人が話し終えたと、同時に目的地である実験施設に着く。見た目は監獄風の建物で実際に拷問の道具や牢屋が建物から露出して見えるルーカス曰わく、地下がありその最深部に動物たちに様々な影響をもたらす、サンプルDが眠っていると言つ。

二人は装備を整えると実験施設に踏み込んだ。

「豪華なロビーね、きっとゲイツも驚く」

「漫食が酷いな、足元に気を付ける」

床板が軋んで独特の音を一人が歩くたび出る、しばらくして突然桜が動きを止める。

「何かが走つてくる・・・遠くない・・・ルーカス双眼鏡貸して」

「あいよ、えーと暗示モードにしてつと」

桜が双眼鏡を使って実験施設ロビーの窓から外を見る。レンズに映つたのは飛行機の乗員がゾンビと化してこちらに走つてくる姿だつ

「まあいわ・・・すぐにロビーをふさぐバリケードを作らなきゃ！」

！」

ルーカスがそれを聞いてロビーのドアをソファや椅子で塞ぎ、桜は全ての窓を締め切った。

ゾンビは肉体は劣化しておらず、あと数秒遅れいたら侵入を許してしまうところだつた。

「数多すぎ・・・ガラスも長くは持たないわ早く行きましょ」

「ああ、しかしすぐ耳だな。つくづく君はすごいよ」

桜はそんな言葉も気にせず、さつさと奥に進む、ルーカスは慌てて後を追いかける。

バギツ

「ひやあ！！」

「桜！」

桜の歩いていた床板が崩れ落ちる、落ちた拍子にブラックパニッシャーを持っていた右腕を床に強打、ブラックパニッシャーを放してしまい桜だけが地下に落下してしまった。かなり深い。

「桜！無事か！」

かなり深く落ちたせいか、声がかすかにしか届かない。

「無事」とにかく命流できる場所を探して！」

「わかった！」

桜は右手を抑えて起き上がる、そしてブラックパニッシャーを残してきてしまったことに気がつく。

「・・・なんてこと！あ、あれがないと不安でわ、私まとも戦えないのに・・・おまけにここ暗い。」

ルーカスは床にブラックパニッシャーが落ちてることに気がつく。「桜、まさか武器なしか！？大変だな早く見つけてやらないと。」

最初の夜（後書き）

桜「やあ、みんなー桜ちゃんだよー」

ルーカス「ルーカスだ、今回あとがきは俺たち一人で担当する」

あとがきのテーマ今回は敵の設定

桜「だつてさ私が分かる範囲で答えるとゾンビに噛まれた奴はゾンビになる」

ルーカス「間違いではないが、厳密に言うと噛まれた傷口からゾンビウイルスが入って数時間でゾンビ化が正しい設定だ」

桜「じゃ、肉体の劣化してないゾンビは突然変異なの？」

ルーカス「いや、肉体の劣化は時間経過による飛行機の乗員たちは最近ゾンビになつたから肉体がまだ朽ちてきてないだけだ」

桜「へえー、じゃあハエとかは？」

ルーカス「モスキートのことか、奴らはゾンビウイルスに感染した奴らの肉を食つて巨大化したから突然変異と言えば突然変異だな。」

テーマその2 二人の弱点

桜「私は、相棒がないと普通の女の子に戻っちゃうの」

ルーカス「相棒つて俺のこと？」

桜「うれしそうな顔すんな、私の相棒はブラックバーフシャード調子に乗るなカス！」

ルーカス「うわあひでえ！」

ルーカス「俺の弱点は良い女だ」

桜「それって私のこと？」

ルーカス「うわあ！否定できない！否定できないよおおーつわあん！」

テーマその3 二人のもつと詳しい事

桜「えーと身長は私162cmでバストなんとEカップだよ!、入るブラがなかなかないから普段はサラシを巻いてます!」

ルーカス「・・・やわらかい」

桜「どこ触ってんだ!変態!」

ルーカス「身長は189だ、え?バスト?計ったことないぞ?体重は87kgだ、筋肉は結構あるぞ!」

桜「わあ 本當だ固い!」

ルーカス「もつと触つていいんだぞ」

桜「うわ・・・触らせて喜んでる・・・」

ルーカスは桜の「ラックパーチシャー」を「イバッカ」にします。そして懐中電灯をサブマシンガンと一緒に化せるパーティを取り出しふマシンガンに取り付けた。

「落ち着け・・・訓練通りやろつ

施設の奥、広いロビーを抜けて監禁部屋の更に奥にある地下へ向かう階段へとゆっくり向かう、ルーカスの呼吸が緊張のせいで荒くなり始める。

呼吸に混じつて別の音がする、トントンと鈍く板を叩くような音だつた、するとルーカスの目の前に白くベタつく糸のような物が垂れてくる。

「なんだこれは？」

垂れて来た先を懐中電灯で照らしていく、ルーカスは嫌な予感がして顔が険しくなる、丁度懐中電灯の光が真上を向く頃。背後に何かいる気配がした。ドンと言う音と共に驚き後ろを振り返つてみると体長が人間と同じくらいの大きな蜘蛛が黒い目でルーカスを捕らえていた。

「うわああ！」

絶叫に反応した巨大蜘蛛がルーカスに飛びかかって来る、危ないところで蜘蛛の下をぐぐるようにしてサブマシンガンの銃口を真上に向けてセミオートで発砲。全弾丸が蜘蛛の腹部に命中、青い体液が吹き出し足を体に引き寄せると背中を地面に当てて倒れた。まだ少しだけピクピクと小刻みに動く。

「なんて、大きさだ・・・こんなのが施設中あちらこりこり、いたらまたもんじゃないな」

不意に脳裏を過ぎる不安、桜は無事だらうか？灯りもなし、武器もなしで敵に出くわしたらまたものではない。

「確か地下一回に配電室があつたな、ヒューズを変えればまだ機能

する筈だ。」

蜘蛛の屍を乗り越え地下へ向かう階段を下りる。

一方、桜は暗闇で身動きが取れずうつ伏せの状態でうずくまつていた、軽く体が震える。

「・・・大丈夫、すぐ目が慣れる・・・あ、携帯」

携帯を開きその僅かな光を頼つて安心を得るがすぐに充電が切れまた暗闇に逆戻りした。

「くそ・・・なんで、ふうふう暗い、嫌」

昼間の頬もしい彼女の面影は完全にない、暗闇は桜を完全に覆つて離さない。体の震えが次第激しくなる、暗闇はそこに潜む何かを想像させる、桜も例外なくその潜む何かの虚像を想像してしまつ。

「くう・・・何もない何も」

必死の自己暗示、だが長くは持たない想像は妄想へと肥大化し幻聴を彼女の耳に襲わせる。

キシャヤヤ！キシャヤヤ！という暗闇に蠢く謎の声、生き物が生き物でない、そういつた感覚、自分の呼吸すら怪しくなりだし恐怖以外何も残らない。

「やめて・・・来るな、誰か助けて・・・ルーカス」

しゃっくり混じりの泣き声、桜の瞳から涙の粒が零れる。そして目を瞑り開かないまま動かなくなつた。

ルーカスは階段を慎重に降りる、地下一階にたどり着き、目の前のフロアの安全を確認。

「仲間が居ればスマーズなんだがな・・・」

地下一階のフロアはロビーよりも広く大きい、変わりいくつもの扉

と壁があつて迷路のようだつた。配電室を探すのも一苦労だつた。

「ここだな、あ・・・鍵が・・・壊すか」

鍵が掛かつたドアノブを破壊、蹴つて扉を開けてすぐに部屋の安全を確認。敵や障害物がないことを確認すると配電室の配電盤を強引にこじ開けて、ヒューズを取り替えてブレーカーを上げる。

「桜ちゃんて、ずるいよね」

同学年の女子が言った。

「なんで私なにもするい」としてないよ?」

桜は答えた。

「してるさ、何でも出来るのにまだ何か足りなさうで、それを俺たちから奪うんだ」

同学年の男子がいった。

「そう、それで先生に誉められて・・・どんな気分?」

続けてまた他の女子が言った。

「私なにも奪つてないよ・・・頑張ってるだけだよ?」

桜はまた答えた。

「黙れ、お前のせいで・・・俺の人生はむちやくちゃだ」

今度は大人の男性が言った。

頑張るのは悪いの? 強いのは悪いの? 何で私攻められてるの?

「おい、見ろよあいつだぜ」

「すました顔して相当の悪らしげ」

「いつか、破滅するわ」

いつの間にか私を排除する視線や噂話しが広がっていた、この頃私は中学生だった。そんな、ある日私はヤクザ風の男に襲われた。
「いくら強くても、銃を向けられちゃ噂の極悪女でも可愛い子猫も同然だな。」

この時正直怖いとかそんな感情はなかった、あつた感情は私を悪者扱いする周りの人間に対する怒りだけ。

「殺す・・・」

「あん?・・・・え、うわー俺の、俺の腕が変な方向に!ひゃ

あ！誰か助けて！」

ヤクザ風の男は持っていた銃を落として、私が蹴りで一瞬にして折り曲げた腕を押さえながら走って逃げて行つた。

その日私は初めて泣いた、怒りと孤独の寂しさで、そして次の日私は転校した。

ブレーカーを上げると機械的な起動音が施設内部に響いた、そして古い電球が灯りを灯し施設内部は多少明るくなつた。

「これで少しはマシな方だ」

ルーカスは再びサブマシンガンを構えて部屋を出る。

「は！夢！なんて、いやな夢なの昔の頃の夢なんて」

桜はうすくまつた状態から、体を起こし目を開けると天井の古い電球が灯りをしているのに、気が付いた。立ち上がり体の関節を回して解すと、奇妙な踊りを踊りながら喋る。

「勝った！オラオラかかつてこいやーー私、極悪う魑魅魍魎おー、ふんふんてやつ！キュツキュキュキュツキュツキュツ、そいや！」

奇妙な踊りが終わつて、しばらくして周りを見渡すと血まみれの死体を見つける。黒い戦闘服に身を包んだ死体だつた。ルーカスと同じ装備、まさかと思い死体を調べる。

「・・・良かつたルーカスじゃない」

死体のデイバックから使えそうな物を回収、サブマシンガンと高周波ブレードを装備に加える。さらに足には戦闘服に付いていたサポート

ートを付け、手にはハーフカットグローブをした。

「ブレードなんて使つたことないな・・・」

練習のつもりで鞘からブレードを出して、振つてみると誰がどう見ても素人芸。

「説明書とかないのかな、よし感で使つ。やつぱりブラックパニッシュヤーがないとな・・・」

サブマシンガンをルーカスと同じように構えて落下した部屋を出る。しばらく奥に進むと階段が見える、階段を上るとすると、階段の踊場にルーカスが以前遭遇した巨大化した、蜘蛛がいた。桜は驚いて後方宙返りで後ろにさがりサブマシンガンを構え直し照準で狙う。

「・・・でかい、なにもしてこないな?」

なにもしてこない、そう思つていたが桜の読みは、外れていた蜘蛛は口のハサミを大きく広げると緑色の液体を桜に吐き出し攻撃、危ないところで、バックステップにて回避液体が降りかかつた、場所はドロドロに溶けていた。

「ひえー怖い怖い、せつかくだしブレードを刺してみるか。」

蜘蛛は先程と同じ場所で同じように、口のハサミを大きく広げ、液体を吐き出すが桜はそれを壁を蹴つて三角跳びで回避その勢いに任せて、背中からブレードを鞘から引き抜き着地と同時にブレードを蜘蛛に刺した。

青い体液が地面に広がる、蜘蛛を乗り越えて階段を上がる桜、そしてルーカスの名前を叫ぶ。

「お~いルーカスどこだー!」

ルーカスの耳に呼び声が届く、ルーカスは声のする方向へ一目散に向かつた、そして桜と再開を果たした。

「無事だつたか・・・ほら君の銃だ」

「ブラックパニッシュヤーーあ良かつたどこも壊れてないよね!心配したんだぞー」

「俺の心配はなしかい！」

「お前も無事でなにより・・・」

適当に扱われ落ち込むルーカス、ルーカス桜の背中に背負つて
ブレードに見覚えがあつた。

「それまさか隊長の」

「ああ、死体から拾つた」

「そうか、もう本当に俺だけが生き残りは
「なに言つてんのよ！私もでしょ！」

桜が珍しく他人を笑顔で励ました。

「そうだな、高周波ブレードも扱えるのか？」

「まあ、感で使つてる」

「感て・・・子供の玩具とは違つぞ大分、いいか使用後はちゃんと
鞘にしまえよ高周波を常に帯びてるから鞘にしまわないとオーバー
ヒートするからな」

心配してルーカスは使い方を簡単に説明した、そして桜が落ちた部
屋へ一旦二人で引き返した。

桜が落ちた部屋へ戻る一人、ドアを開け中へ入る。視界に入ったのは二つの扉と一人の死体。

「隊長……」

ルーカスは死体に近づいて、死体の無線機を手に取ると桜に渡した、そして簡単に使い方を説得した。

「無線機か、イヤホンタイプとは随分かっこいいじゃない」

「気に入つたか……」

部屋の奥の二つの扉、ヘリが迎えにくるまで残り約一日。

「施設は思ったよりも、この先は複雑だもう時間もあんまり無い二手に別れて、サンプルを見つけ方が連絡をしよう」

「了解、私は右に行くわ」

桜は右の扉の前に立つとドアノブに手をかける、そして引いた時、ルーカスが一声かけた。

「絶対死ぬなよ」

桜の動きが止まりルーカスを見る

「そつちこそね」

桜はドアを開け中に入り姿がやがて見えなくなつた。ルーカスは左のドアに向かい立ち止まり無線機のダイヤルを変える。

「ひちら、HQ」

「ひちらルーカス・ハル、サンプル口まで残り少しだ、ヘリの用意を」

「了解した、もう一日目の明け方になる急げ。」

通信が終わるドアノブを引き扉を開く、中に踏み込んで少し経つと、戦時中を作られたとは思えない近未来的な機械に溢れたフロアに出た、生物を保管する大きな試験管や檻が無数にある所々血のよ

うな跡が付いている。ルーカスは銃をフロアの奥へ進む。

「このフロアの電力は止まってるな、ついてないぜエレベーターは使えないか。」

だがしばらく経つとフロアに起動音のような音が伝わりアナウンスが流れる。

「機能運転を開始します。」

アナウンスが流れまたしばらく経つと、エレベーターの電力が回復した。ルーカスはエレベーターの前でしばらく待つ最深部にはこれで直進できる。

「誰が電力を？ 桜か？」

無線機の呼び出し音がなる。

「あ、ルーカスなんか色々スイッチあつたからいじつたんだけど、変化ない？」

「変化ありだ、良い方向へな」

「そう、じゃ私は私で進むね」

無線機の通信が終わる、不意に後ろから羽が羽ばたく音。

「モスキートか・・・エレベーター到着まで待てないよな？」

モスキートが三体、ルーカスを見つめ舌を出し攻撃の体制になる、前の一本足はハサミ。

ルーカスは自分の足のホルスターからバンドガンを取り空中に放り投げる、片手でサブマシンガンを撃ちまくる最初から命中には期待をしてない撃ち方、だがその内の二体のモスキートの頭に銃弾が命中、倒す事に成功だが弾倉は空になる。残り一体はハサミを構えながらルーカスに羽ばたいて直進、だがルーカスはハサミをかわして、直進してきたモスキートの頭をジャンプ台にし飛び上がる。飛び上がった先には丁度最初に投げたバンドガンがまだ空中を舞つていた、それをキャッチし地面に着陸するとすぐに振り向き、モスキートの頭を銃弾で貫いた。

「・・・ふう」

エレベーターから到着のブザーが鳴る。

桜は電力フロアから階段を使い下に降りていた、階段は螺旋状になつていてかなり長い。下に降りるにつれなぜか蜘蛛の巣が多くなつていつた、桜は息をのむ螺旋階段はだんだん幅広くなつていつた。蜘蛛の巣をよけながら進む、そして一番下まで降り切ると薄暗い部屋に出た、中は蜘蛛の巣だけでとても気味が悪い。

だが蜘蛛たちは全くいいない、周りをよく見渡し桜は警戒する、ふと上を見上げると今までの大きさを遥かに凌ぐ大きさ蜘蛛がいた。

蜘蛛たちのボス。

「・・・こりにはきついでない？そつか横糸を踏んでないから分からんなんだ」

蜘蛛の巣というのは縦糸と横糸に別れ形成される、縦糸は自分の動く範囲として、横糸は獲物を捕らえる為にある。蜘蛛は昆虫の中では単眼である為、獲物を目で見つけるのは難しい。

「蜘蛛に詳しくて良かつた・・・」

そう思つた瞬間地面に張り巡らされ横糸をあつさり踏んでしまつた。粘着力が強く離れない。

「ヤバい！」

蜘蛛に見つかった、高周波ブレードで蜘蛛糸を速やかに切る。蜘蛛は黒い瞳で桜を捕らえた。

蜘蛛はゆつくりと糸を尾からたらし

天井から床に降りる、桜はすぐに施設内の柱に隠れるが、横糸が張り巡らされていた、横糸の振動が蜘蛛に伝わり居場所がバレる。蜘蛛は柱に向かつて突進する。

「うわあ！」

桜の隠れていた柱は碎かれ、桜は丸見えの状態、背筋すら氷るありえない破壊力。桜はまたすぐに走り出し別の小さな部屋へ逃げ込む。資料室とかかれた標識があつた部屋だった。

「はあはあ、ここは横糸ないよね・・・良かつた、でも奥に進む為にはあいつがどうしても邪魔だな。」

蜘蛛がいた部屋には奥に進む為の降下エレベーターあるが、エレベーターの扉の前には横糸が、隙間無く張られていて、蜘蛛がいる限りその糸に触れた瞬間攻撃される為、近づけない。手段があるとすれば蜘蛛を倒す以外ない。

「ここまで来てどん詰まりか・・・ん？」

桜の目の前にある棚から資料が一枚落ちる、何気なくそれを取ると読んでみる。

「変異した生物について、肥大化と攻撃本能のせいで兵士の半分が失われた、だがこれもサンプルDの作用の新しい効果と言える。問題は命令が聞けない事と、急激な肥大化により腹部から頭部にかけての耐久力が落ちることだ、奴らに命令と耐久力をどうにかさせれば軍事的に利用可能だろう。さらなる進歩を期待しよう。」

桜の緊張した顔がほぐれて、笑みになる。桜は高周波ブレードを鞘から抜き資料室をでる、相変わらず気味悪くゆつくりと蠢く超巨

大蜘蛛。桜は横糸に触れぬ様に、フロアの柱へ近づくそして高周波ブレードで柱を一刀両断、柱が崩れて落ちる。柱は四メートルはあつた。崩れ落ちた柱を空中に蹴り上げ落下直前でサッカーボールの如く蹴り、柱は蜘蛛の頭部を直撃。グシャリという鈍い音を立てて蜘蛛の頭は、潰れ青い体液が地面に大量に広がつた。

「うへーばつちー・・・さすがに柱蹴り飛ばすのはすごく疲れる」

桜は汗をジャケットの袖で汗を拭つた後高周波ブレードを鞘にしまう。そしてブラックパニッシャーを構え、エレベーターへ向かう。

パタパタ パタパタ

床を強く踏む音がする、何回も。やがてそれは人間の足音だと分かる、桜はブラックパニッシャーをホールスターに押し込むと、高周波ブレードを両手でしつかり握る。

「ゾンビか、入口のガラス破ってきたな」

螺旋階段の方に人型の影が、いくつも映るのが見える。桜はエレベーターのドアに絡みついた蜘蛛糸を高周波ブレードで切ると、ボタンを連打。

「早く！早く！あの数はヤバいって！」

エレベーターはまだ来ない、先に桜のいるフロアに来たのはゾンビだつた。

桜を見つけたゾンビは一度走るのを止める、それに釣られ他のゾンビも止まる。

「・・・ヤバい」

「グオオオ！」

最前列の真ん中にいたゾンビが雄叫びをあげた瞬間、桜にゾンビたちが突っ込んで行く。

チーン

「やつと来た！」

エレベーターがようやく到着、桜は中に駆け込み閉まるのボタンを押す。

「閉まれ！閉まれ！早く」

閉まる扉にゾンビの頭が挟まり閉まらない、ゾンビは手で扉をこじ開けようとする。

「こら、離せ！離してよ！」

手で扉をこじ開けよとしていたゾンビが桜の脚を掴んで離さない。必死に抵抗する桜。だがしりもちをつきエレベーターの奥から引きずられてしまう。

脚に冷たい感触が伝わる、桜の脚からは血が出ていた。その出血の原因はゾンビの歯だつた。噛まれた噛まれてしまつた、桜はそう思いながらもホルスターからブラックパニッシャーを出し、弾丸を発砲。自分の脚を噛んだゾンビの頭を打ち抜き、噛まれてない脚でゾンビを蹴り飛ばし、エレベーターの外へやる。

「くそー！ 噛まれた！ 噙まれた！ ウアアアアア！」

桜は泣き叫び噛まれた脚の部位を確認。しつかりと歯形のついた、かみ跡が残つていた。

「ルーカス・・・」

「なんだ？ 桜」

「噛まれた、私噛まれたわ」

「何だつて！ ・・・ 落ち着け桜早まるなよ！」

「落ちていられるか！ 私も数時間で、もう」

「今どこだ！ 僕はサンプルDの田の前までくる！」

「エレベーター・・・ 多分下に向かってるから私も、もうすぐ

チーン

ルーカスがサンプルドのあるフロアでエレベーターの到着音を聞く。エレベーターの中には桜が横たわって倒れていた。

「桜！ひどい熱だ・・・くそう！」

ルーカスは桜を抱き上げエレベーターから出し周りの安全を確認すると、すぐ近くのソファに寝かせた。桜は意識はあるが、衰弱しきっていた。

「治療法がないと決まった訳じゃない・・・」

ルーカスは桜の手を握りしめそう言つとサンプルドを取りに最後のエリアへと向かつた。

サンプルドのある場所はガラス張りの薬品保管室にあり、その手前に薬品に関する資料などを保管している部屋もある。ルーカスは薬品保管個手前の資料室へ向かつた。

始まりの終わり

足元にひどい違和感を覚える桜は今、感染し発熱を起こしそファ
で寝ている。汗が服を湿らせ、肌に張り付く。意識はあるが思うよ
うに体が動かない。ルーカスは桜の感染を止める為一人最深部のサ
ンプルDへ向かった、その途中にあるサンプルD関連の資料が保管
された部屋に入る。

「感染からまだ時間はそう立つてないな・・・でも発熱なんて例聞
いたことない」

ルーカスは感染のメカニズムについてもブリーフィングを受けてい
た、数時間で人間の場合ならゾンビ化するが、それまでの体調不良
は一切ないと言つ。

「考えてる場合じゃない！」

ルーカスはサンプルDに関する資料を片っ端からかき集め感染の進
行を止める方法が、書かれた資料を探す。

「ない・・・ない！くそ！桜に死なれたら脱出できない！」
もう一度資料に良く目を通して行く、時間は迫る一方。

ふと目が覚めた、私は死んだのか？そんな疑問が頭をよぎる、脚
の怪我は治つてる。熱もない。

目が覚めて身の回りを確認するそして、自分がどこにいるのかを
確認するため、私は回りを見渡した、私の住んでいる街、東京だ。
私は懐かしい雰囲気に包まれて安心した。しばらく街を巡り歩く、
変わらない街の雑踏、変わらない風景、何もかもが懐かしい。やが
て街を歩き続けて、自分の家に付いた。今日は疲れたしゆつくり休
みたい・・・あれ？私は・・・なにか大事な・・・。わからない、分

かりたくない。家に入つたら分かるのに分かりたくない。

私は確か、噛まれて・・・！脚から血が！痛い痛い痛い！嫌だ痛いのは嫌だ！助けて誰か・・・ルー・・・カス・・・。

「おき・・・・・・」

誰が私を呼んでる？

「桜！」

知つてる、ハツキリした発音の英語の声。家中から？違う、空の上だ。

「・・・・く・・・足りな・・・」

何だろ、私・・・空には行けないよ。

「これでどうだ！！」

空から大きな手が出てくる私の体をすっぽり包める大きさだ、私はその手にしがみついた、しがみついたら、眠くなつた。

「うわあ！！」

「起きたか！薬は効いてるのか？」

桜が目を覚ます、まぎれもない現実の世界ソファの上、体から汗がすっと引き、脚の怪我には包帯がされていた。ルー・カスの手には

注射器、中の残つた液体が怪しく発光していた。

「抗体が効いたんだな・・・」

「抗体?」

「サンプルDをベースに真逆に成分を配合した、俺特製のお薬だ」
自慢げにルーカスは言う、ルーカスの口調からするとサンプルD
は回収出来たようだ。桜はサンプルDがどんなものか見て見たくな
つてルーカスに訪ねる。

「ああ、これさ」

ルーカスがデイバッグから試験管に入った液体を桜に見せた。

「目的達成ね、施設の外に出ましょう」

「俺がきたルートを使おう

「了解」

ルーカスがここまで来たルートを真逆に進むとすぐに施設の最初
みた監獄風のフロアについた。

「嫌なこと思い出した」

「ああ、桜が落ちた場所だね」

「うるさい！言うな！」

ルーカスは理不尽に怒られた、桜の声は施設内によく響き渡った。

パタパタ パタパタ

聞き覚えがある嫌な音・・・桜はハツとなり口を塞ぐ、奴らを呼び出したのは自分の声だ。

「ごめん、ルーカス・・・」
「走れー！！」

二人は施設を飛び出し朝日を拝む、ゾンビと追っかけっこしながら、
だが走っていた二人は笑顔だった。なぜならもうすぐ悪夢のこのバ

イオアイランドから脱出、出来るのだから。

「いらっしゃり ヘリチーム、ルーカス応答せよ」

「はあはあ、もうすぐ海外だ！着陸前に森に赤いスマートが見えるはずだ、そこにミサイルを頼む」

「了解」

ルーカスは装備からスマートグレネードを取り出し、大きくふりかぶつて投げようとするが手からすっぽ抜ける。

「ごめん、桜投げ損なった・・・」

「あほー！走れー！」

ヘリコプターからミサイルが打ち出される、そして森を焼け野原にした、ゾンビ達が肉片へと変わる。それに混じって一人の人間が砂浜まで吹き飛ばされた。激しく地面に打ちつけられたが無事のようだ。

ヘリコプターは砂浜に着陸し、ルーカスと同じ黒い装備に身を包んだ、男達が銃を構えて降りてくる。一人の男が倒れたルーカスに近寄る、ルーカスはすぐに立ち上がり、サンプルドを渡す。男はご苦労と一言。

そして男はルーカスに桜の事を聞く。

「なぜ生きてる？飛行機の乗員、及び関係者は殺すよう指示したはずだ。」

「彼女が協力してくれたから今があります、殺す必要はありません」ルーカスはサンプルドを持った男に桜を殺す必要がないと訴えるが、男は聞こうとはしない。そして男が手を上げると、他の男たちが桜を囲み銃を構える。

「殺せ・・・協力したことに感謝はするが今はもはや不要だ」

桜は打つ手なし、手を上げただ縮まったように目をつぶり動かない。

「やめる・・・やめるー！」

ルーカスは銃を乱射、桜はその場にすぐさま伏せて回避した。桜を

囮んだ男たちに弾は命中する、しかしそれを見たサンプルDを持った男がルーカスに銃を発砲。ルーカスのわき腹に命中。

「馬鹿な男だ、惚れでもしたって・・・・ぐは！」

刃物のような物が男の背中から貫通、高周波ブレードを持った桜の姿が男の後ろにはあつた。

「こんなガキに・・・」

桜はルーカスに駆け寄る。

「大丈夫？」

「ああ、なんとか・・・・ぐそ」

桜はルーカスを支えながらヘリに乗る、ルーカスはヘリを離陸させ島から脱出。悪夢3日間が终わった。

12月30日

病院に搬送されたルーカスは容態が急変、桜にみとられ死亡した。

1月1日

桜はサンプルDをルーカスを雇っていたPMCに渡し、その後わざと通報PMCはFBIの取り調べで、生物兵器の開発が発覚し倒産した。

1月2日

文月桜はサンプルDに対して、唯一の抗体保有者としてアメリカ政府に拘束される。

1月7日

抗体保有者人体実験に失敗、文月桜は死亡、だが遺体が消える。

1月21日
死 者 が 世 界 を 歩 く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222x/>

バイオアイランド seventeenth birthday

2011年10月30日08時07分発行